新発見の細川満元宝篋印塔 ― 細川氏と高野山高祖院 ―

木下　浩良

一．はじめに

弘法大師空海が開創した高野山（和歌山県伊都郡高野町高野山）は、現在も一一七の塔頭寺院が法灯を繋ぐ真言宗の聖地である。その塔頭寺院の中の蓮華定院は、戦国武将の信州真田氏が宿坊とした寺院として著名である。[註1] 同院の寺紋は六文銭で、今にその余風を残している。

同院の開基は建久年間（一一九〇～一一九九）の鎌倉時代初頭の頃で、公武両者からの信仰を得た行勝上人（一一三〇～一二一七）と伝える。同上人は特に、源頼朝からの帰依があったとされる。元は奥之坊と称し、院号を念佛院とした。[註2]

先般、平成二十七年八月に実施した同院境内地の真田信之・信政の両五輪塔調査の際に、その周辺から室町時代前期の武将で、将軍足利義持を補佐して幕政の運営に関わった幕府管領の細川満元（一三七八～一四二六）の宝篋印塔の残欠を、偶然に見出すことができた。

ここにその石塔の概要を紹介して、若干ではあるが考察を述べたい。大方の示教を頂戴できれば幸いである。

二．細川満元の宝篋印塔

宝篋印塔の方形の基礎のみの残欠品である。硬質の砂岩製で、法量は高さ二六cm、幅三二・四cm、奥行三二・二cm。側面の高さ二〇・四cm。上部は二段式となっていて初段目の高さ三cmで幅二四・八cm、二段目の高さ二・六cmで幅一九・六cm。上端には塔身を受けるための直径六・六cm、深さ一・六cmの枘孔がある。正面と思われる面には輪郭を巻き、その中に、

岩栖院殿悦道
歓公大禅定門
広永三十三年
十月十六日

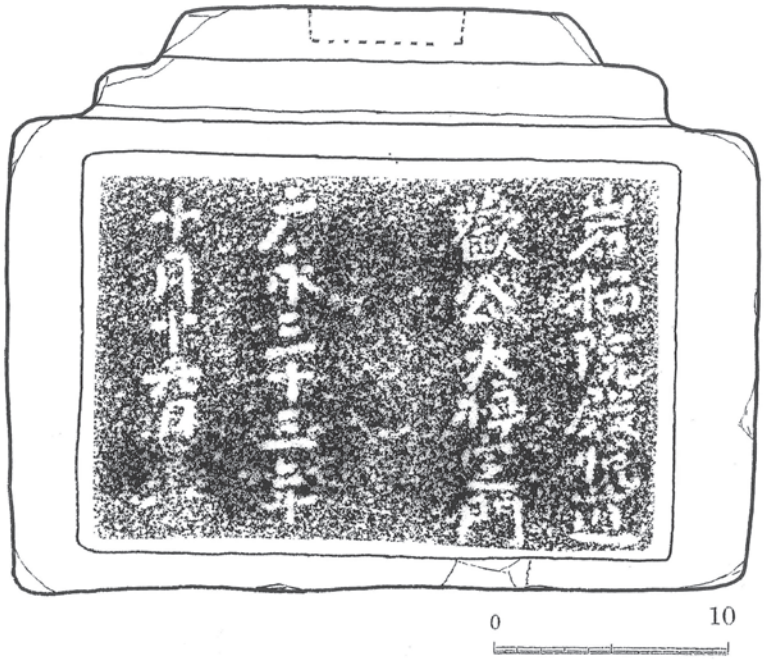
【上】図版 1

細川満元宝篋印塔（正面銘文）

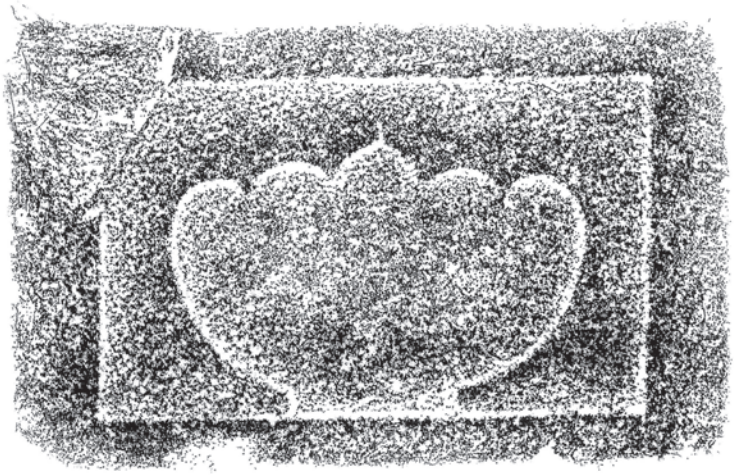
【下】図版 2

細川満元宝篋印塔（右側面の格狭間）

と陰刻銘文を刻する。他の三面はいずれも輪郭を巻き、その中に格狭間を刻する（図版1～4の写真・実測図・拓影参照）。法名は、事実上の最高位の諡号とされている「院殿号」であり、一見して相当の権力者のものと推察された。博捜した結果、



図版３　細川満元宝篋印塔実測図・銘文拓影



図版４　細川満元宝篋印塔背面拓影

室町幕府管領の細川満元の法名であることが判明した。[註3] 銘文にある「广」は「応」の異体字で、応永三十三年（一四二六）十月十六日となる。この時は、細川満元の没年月日であった。[註4] 満元は享年四十九である。

陰刻銘文の手法も室町時代のものである。宝篋印塔全体の形態も室町時代前期のもので間違いなく、格狭間の形態も同じく室町時代前期頃のものと判断される。細川満元の没後、そう年を経ることなく造立された宝篋印塔と判断される。

同時期の高野山で造立された宝篋印塔の他の事例として、応永二十八年（一四二一）在銘の奥之院で見出されたものを次に挙げる。同じく基礎のみの残欠品である。硬質の砂岩製で、法量は高さ二三・四 cm、幅二九 cmを測る。上部は二段式となっている。正面と思われる面には輪郭を巻き、その中に、

東江春公禅門

广永廿八年

五月七日

図版 5　応永 28 年（1421）宝篋印塔（正面銘文）

図版 6　応永 28 年（1421）宝篋印塔（背面の格狭間）

と陰刻銘文を刻する。他の三面はいずれも輪郭を巻き、その中に格狭間を刻する（図版5・6の写真参照）。細川満元の宝篋印塔と比べると、一回り小さく造られたものであるが、形状は同じで、格狭間の形も同形である。細川満元の宝篋印塔をさかのぼる、五年前の紀年銘を刻したものである。

格狭間の各時代の形状については、川勝政太郎氏が指摘されているように、平安時代後期のものは上方のくり返しの花頭曲線が浅く、両側の曲線がゆるくふくらみ気味で、おおらかな形である。鎌倉時代にはそれが引きしまり、花頭曲線も両側の曲線も張りがあって力強さがあるもので、格狭間の完成された形状を見ることができる。南北朝時代もこの鎌倉時代の系統を引くが、退化のきざしがあらわれる。室町時代になるとさらに退化して、花頭曲線が萎縮して、両側線も弾力性を失う。[註5] まさに、その室町時代の典型的な格狭間の形を示しているのが、細川満元塔とその類例に挙げた応永二十八年（一四二一）塔である。

この二基の室町時代前期の宝篋印塔の形態は、他の高野山における同時期のものに共通するもので、おそらくは同一か同一系統の石大工により造られたものと考えられる。この詳細な高野山における宝篋印塔のタイプ分類については、別に稿を改めて考察を述べたい。この時期の高野山側の石大工の手により、両塔は造立された宝篋印塔と推察する。

図版7
真田信幸（向かって右）と真田信政（向かって左）の大型の五輪塔

この細川満元の宝篋印塔の基礎が見出された地点は、蓮華定院の裏山にあたる同院北東部である。同地は、山の頂部をえぐり、万治二年（一六五九）十月十七日造立の真田信幸五輪塔と、同年二月五日造立の真田信政五輪塔の大型の大名墓を立てた地である（図版7参照）。

周辺にはこの宝篋印塔の他にも、室町時代の遺物と推定される一石五輪塔などの石造物が散乱していて、元は蓮華定院の裏山全体に石塔が造立されていた様子が伺える。細川満元の宝篋印塔もそれら室町時代に造立された石塔の一つと思われる。発見時は、向かって左に立つ真田信政五輪塔が造立されている、四十九院の石柵の

左側の草むらの中で見出した（図版8参照）。真田信幸・信政の両塔の造立に際して、かつて造立されていた石塔が一掃されて、さらには山肌も削られて整地されたものと考えられる。さらに周辺付近をくまなく調べたが、この基礎部分の他に一具とされる宝篋印塔の残欠は見出せなかった。[註6]

次に、本宝篋印塔の銘文が没年月日であることと形態から推定されることは、先にも触れたように細川満元が没後の直後に造立されたものか、年忌法要として満元の一周忌か三回忌における造塔であった可能性が考えられる。

細川満元の院号の「岩栖院」は、現在では京都の市内の地名として今に残っている。京都市上京区岩栖院町（がんすいんちょう）である。その地名は、同地に細川満元の邸宅があり、満元の院号より由来している。[註7]

図版8　発見時の細川満元の宝篋印塔

また、細川満元が生前に建立した岩栖院（がんせいいん）と称する臨済宗寺院もあったことも指摘されている。同院があった地点は、京都市東山区下河原町の高台寺が建立された地で、応仁の乱で烏有に帰したとする。[註8]

一方、細川満元が建立に関わったとする寺院に、尼崎市の法華宗大本山本興寺が挙げられる。法華宗本門流の祖である日隆が尼崎付近を布教した折に、摂津国守護であった細川満元が夫人の懐妊に際して男子誕生の祈願を依頼して、無事に男子が誕生したことから、その礼として同寺が建立されたとする。[註9]

今回、真言宗の聖地高野山で細川満元の石塔が発見された意義は、上記の満元の信仰面からも貴重である。生前は臨済宗寺院を建立し、自身の祈願のためには法華宗寺院を立て、さらには死後においては真言宗の聖地の高野山―この場合は弘法大師空海ご入定の聖地の意味か―への石塔の造立と、多岐にわたっている。特に、石塔造立の地は前記の京都東山の岩栖院の地にもあったであろうと、実際に京都において細川満元の石塔は見出されてないが推察する。それ

は、高野山への造塔は一般に分骨か遺髪が納められたものであって、そのこと自体は細川満元自身が相当な弘法大師信仰者であったことを今に伝えているものと考える。

また、細川満元の供養に関する史料としては、「細川満元朝臣十三回忌品経和歌」および「細川満元朝臣三十三回忌品経和歌」があるが、[註10] この二点の史料からは高野山における造塔を物語るものは見出せない。

三．細川氏と高野山高祖院

次に、何故細川満元の石塔が蓮華定院境内地の裏山付近より見出されたのか、考察を進めたい。

先ず、高野山における石塔造立の場所としては、弘法大師空海の御廟がある奥之院に集中しているが、今回の石塔と同じで、奥之院以外の高野山の塔頭寺院境内地でも石塔造立があったことが認められる。その理由について、筆者は中世において高野山全山がアジール（聖域）であったことを別稿で指摘したことがあった。[註11] 高野山奥之院は確かに弘法大師空海が入定する聖地の中の聖地ではあるが、高野山内であればその造塔の意義は変わらないことも指摘した。[註12]

蓮華定院の沿革については前に述べたように、行勝上人による開基とされている。同上人は戦乱で荒廃していた高野山の堂塔伽藍の復興に尽力した人物である。ただ、その後の蓮華定院と細川家との関連性を導く史（資）料は見出されない。

蓮華定院と武将との関係を物語るものは、同院所蔵の古文書である。これも先に触れたように真田家と蓮華定院が取り交わした、真田家歴代当主が発給した「蓮華定院宿坊証文」の他には、信州の村上家・小泉家・伴野家・大井家等の諸家の宿坊証文と、[註13] 戦国時代から江戸時代初期の武将の肥前国有馬晴信・直純の書状十数点が同院に伝わっているため、それらの武将との交渉は分かるが、細川家との関係を示すものは皆無である。

そこでさらに、高野山と細川家を関連づける史料がないかと博捜すると、細川満元とは直接は無関係ではあるが、同じ細川一族で南北朝時代の武将の細川顕氏が、高野山の塔頭寺院の高祖院へ暦応元年（一三三八）に発給した、「細川顕氏寄進状」が挙げられる。この古文書は正文で、既に『大日本史料　第六編之五』暦応元年十月九日の条に翻刻されている。しかしながら、そ

れは水戸藩の『大日本史』編纂のための採訪史料集の『南行雑録』（佐々宗淳編）からの転載であって、史料の一行分が脱落する。[註14]『南行雑録』に収録史料ついては、東京大学史料編纂所ホームページのデータベースにより確認したが、他に高野山高祖院と細川氏の関係を語る史料は無かった。逆を言うと、本寄進状の存在が江戸時代より広く知られていたことが分かる。長文の寄進状であるが、煩をいとわず紹介すると次のようになる。改行の印として」を用いた。

高祖院が顕氏から寄進を受けたのは、和泉国土生郷の地頭職三分一で、護摩支具・燈油料などの寄進の石高のそれぞれの実数を計算すると一七六石であるが、文書で明記する総石高は一六七石と記していて間違っている。本状の紙質は楮紙。法量は、縦三三・七cm、横一六〇・二cm。寄進状にしては、長文のものとなっている。高野山大学図書館が、高野山三宝院から寄託を受けている資料群の一つである。[註15]現状は巻子本に装丁されている。本寄進状は三紙を継いだもので、その継ぎ目には細川顕氏の紙継目裏花押が二箇所ある。細川顕氏といえば、足利尊氏の側近の有力武将であったことは言うまでもない。

寄進

高野高祖院別願長日光明眞言護摩料」所和泉國土生郷地頭職三分一絵図在別紙」事

護摩支具　　貳拾石

佛　　供　　參石陸斗

燈油料　　參石陸斗

供僧陸口供料　　佰捌石人別拾捌石

承仕參人供料　　拾石捌斗人別參石陸斗

佛閣道具等修理料　　參拾石院主之沙汰

已上佰陸拾柒石

右當山者、法身成道之密場、大師入定之」靈窟也、賓劒出自地、表先佛遊化之瑞、」金杵懸于松、示密教相應之儀、東西龍

臥、」観花藏於心海、南北虎踞、念實相於此山、」一詣彼所者、不假聖眼、忽拜都率、適歸其」法者、不改凡身、頓成佛位、然問歴代　英主、」運　叡心兮翠華幸南、明時重臣凝歸」敬兮丹棘無外、就中、當院者安大師影像、」仰利生之徳、爲　勅願道場、祈國家之福、故」卜此勝地建壇場、設陸口清淨信侶、始置」光明眞言護摩、久祈　聖朝安全、武門」長久、殊資先祖菩提、闘乱死靈、抑爲彼」料所永寄進件地、一投佛界之財、再不歸」俗境、縱雖及末代、豈不思此理乎、迄于子々孫々、」深敬信之思、於寺領田園、不可成違乱煩、若背」此誓願者、非顯氏餘流、存内外之孝道、可怖冥」顯之照覽、但於供僧者、不依師資之讓、」専可撰薫修之仁、乞願継勤行於五十六」億之佛庭、施利益於三界四生之群類、」三々平等之智火、速燒三重妄執之薪、」事理相應之觀念、忽開本有輪圓之覺、」仍寄進状如件、

　　暦應元年十月九日從五位上行兵部少輔源朝臣（花押）

細川顕氏の先祖菩提と、南北朝内乱の闘乱死靈等のために、長日光明眞言護摩供養を修すための寄進状である。アジール（聖域）としての高野山の性格や参詣の功徳をはじめ、高祖院が弘法大師の御影を安置し、六人の僧侶を設けた勅願の道場であることなど記している。

同寄進状については貴重で、さらに詳細な検証が必要である。「勅願道場」としている点はどの天皇の勅願によるものか。『紀伊続風土記』の高祖院の項によると、「光明帝院宣」として、「勅願所の宣旨今尚宝庫に在」とあるが、同寄進状が発給された暦応元年（一三三八）当時の天皇が北朝の光明天皇であって、同天皇が譲位する正平三年（一三四八）以前であり、むしろ光明天皇勅願の寺院であったことが考えられるなど興味は尽きない。

いずれにしても、細川顕氏が高祖院を祈願所としていたことを明らかにする寄進状である。高祖院は、鎌倉時代末の元応年間（一三一九～一三二一）を開基とし、弘法大師を本尊とした故に同院名になったとしている。[註16]

高祖院については後世の史料ではあるが、注目される関連史料が指摘される。それが、江戸時代前期の寛文十二年（一六七二）に、一無軒道冶が著わした『高野山通念集』である。同文献は、女人禁制のために高野山に登れない女性を対象に記された高野

山の名所案内記である。その中の、高祖院の項目に、

禅定法皇、前光明院殿の神主顕氏、細川家代々の諸尊霊、慶長年中に建立し、晨夕の勤行をこたらず侍る

とある（傍点筆者）。(註17) 慶長年間（一五九六〜一六一五）のこととあるが、細川家代々の霊を祀る霊屋か位牌堂的な存在のものが建立されたことが伺われる。それとともに、細川顕氏以来、細川家代々の諸霊が、高祖院で代々祀られていたことが推測される。細川満元についても、同じ細川一族ということで、この高祖院で供養されていたのではなかろうか。

また、細川顕氏寄進状の内容は、上記のように高祖院に対して祈願所としての性格を要求するものである。さらに、細川家と高祖院が宿坊契約を結んでいた可能性も、明確な史料はないが伺えるものと推定する。南北朝時代の有力者と、高野山との関連を伝える史料がある。それが、高野山における初出の宿坊関係史料として挙げられる、高野山勧学院文書の中の建徳二年（一三七一）「金剛峯寺五番衆契約状案」である。(註18) その文中に、

旅人引事、且為二寺家悪名一、且為二旅人難義一、任二先規一可レ被レ加二治罰一、至二宿坊一者、不レ論二権門勢家一、可レ被二破却一事

とある（傍点筆者）。

同文書は高野山参詣人に対して客引き等を禁ずる条々の中の一文である。建徳二年（一三七一）当時、既に権門勢家と高野山の塔頭寺院が宿坊関係にあったことを示唆する史料である。宿坊制度そのものを否定した内容で、権門勢家を論ぜず寺院を破却するようにとの文面は、逆を言えば当時の高野山の塔頭寺院が、宿坊制度が広まっていてその宿坊契約の上に塔頭寺院が成り立っていたことを示している。本状は細川顕氏が高祖院へ寄進状を発給した暦応元年（一三三八）から、三十三年後のことである。

それでは次に、その細川家の祈願所であった高祖院は、高野山内のどの地点にあったのか、記録や高野山の古絵図で検証する

と、蓮華定院所在の谷名である一心院谷の東隣の五室谷にあった。[註19]

今回、蓮華定院の境内地で見出された細川満元の宝篋印塔と、この高祖院とは緊密な関係があったものと推測する。先にその私見をいうと、この新出の細川満元の宝篋印塔があった地点は、元は高祖院の境内地であったと考えられるのである。

そのことを確認できる上限の史料として、室町時代の中頃の文明五年（一四七三）に記された『高野山諸院家帳』が挙げられる。[註20]これによると、高野山内の塔頭寺院は以下の十一か所に分かれて記載されている。

西院墾道南北　南谷道南　谷上院道北　壇上道北　中院道北　五室道北鼻　千手院道北奥　中別所道北　小田原道南北　西谷道南　東谷道南

地名としては、「西院・南谷・谷上院・壇上・中院・五室・千手院・中別所・小田原・西谷・東谷」となる。この中には、蓮華定院の谷名である、「一心院」が無い。

高野山は「高野十谷」と言って江戸時代後期においては十の谷々の、「本中院谷・谷上・西院谷・南谷・小田原谷・往生院谷・蓮華谷・千手院谷・五室谷・一心院谷」に分かれていたが、[註21]室町時代中頃において一心院谷は五室谷に含まれていた。『高野山諸院家帳』が記す「五室道北鼻」の寺院名は、

極楽堂　平等智院　最禅院　光明乗院　光台院　大定院　長遍法眼堂　大日寺　安養院　高祖院　浄菩提院　修学院　華遊院　不動堂　一心院　丈六堂　寂静院　文殊院　菩提院　隆照塔　勢至堂　塔　金光院　道阿弥堂

である。五室の地に「一心院」そのものが含んで記載されている。

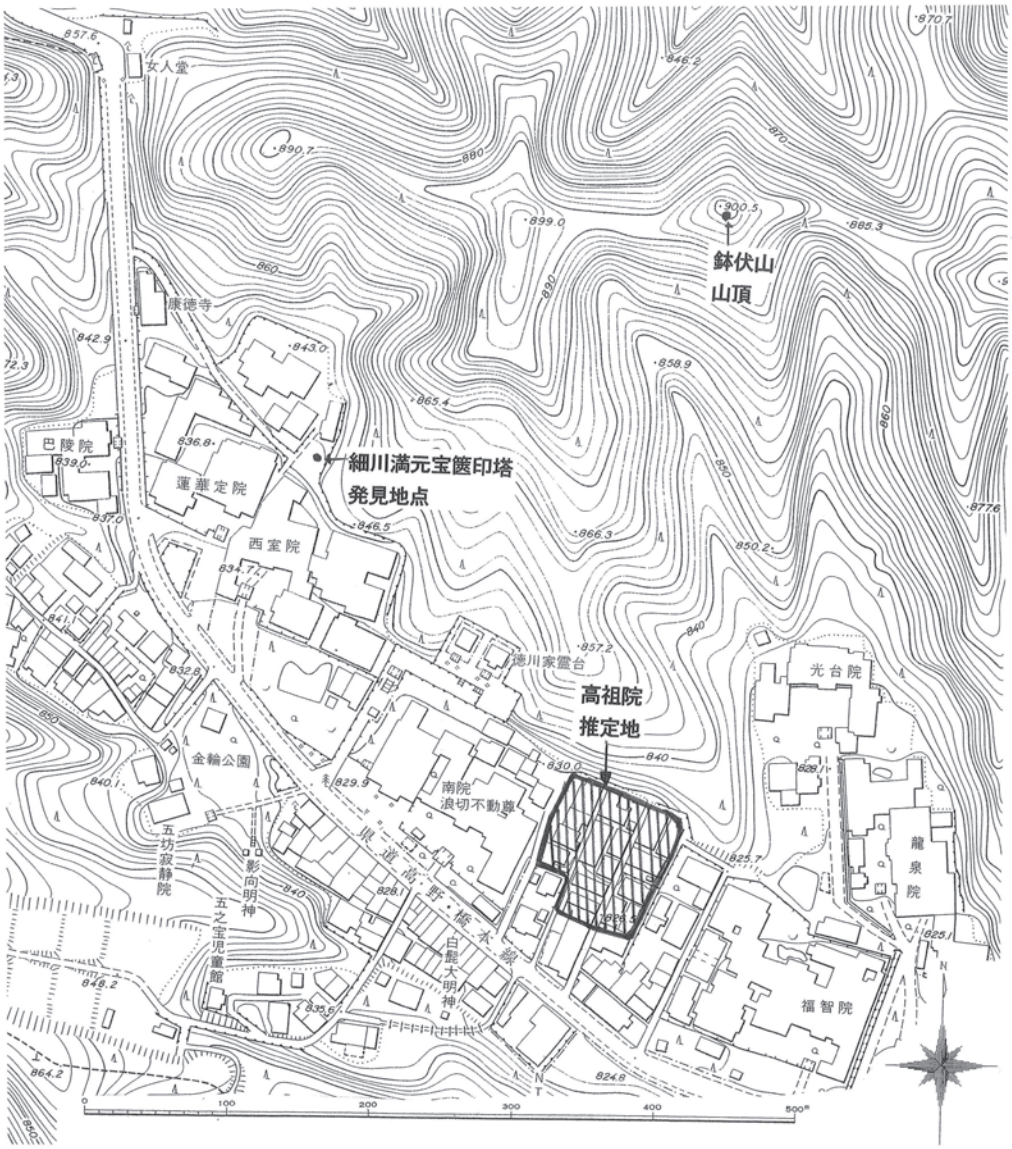
高野山の谷名は時代とともに変遷の跡が見られる。[註22]なお、蓮華定院の名が見られない点については、『高野山諸院家帳』その

図版９　寛政８年「高野山古絵図」に見る蓮華定院と高祖院周辺の様子
（日野西眞定編『高野山古絵図集成』より転載）

ものの性格が主要寺院を記載したもので、小坊については省略しているためと考えられ、そのことによる未記載とされる。[註23] 高野山は江戸時代後期において「高野十谷」としてであったが、少なくとも『高野山諸院家帳』によって室町時代の一心院谷と五の室谷は同様に扱われていたことが指摘される。

それでは、問題の高祖院は五室谷のどこであったのか。現在、高祖院は同じ高野山の塔頭寺院の三宝院に院号を移している。高祖院は、明治二十一年（一八八八）の高野山の大火で焼失したため、記録等は殆ど残っていない。江戸時代の高野山古絵図の正保三年（一六四六）「御公儀上一山図」、承応二年（一六五三）「高野山絵図」により検証すると、現在の聖方の東照宮が立てられている東側に高祖院は敷地を持ち、寺院が建立されている。[註24] この高祖院の位置は、先に述べた明治二十一年（一八八八）の高野山の大火で同院が焼失するまで変わらない。[註25] 寛政八年（一七九六）「高野山古絵図」により高祖院から蓮華定院付近の様子を挙げると、図版９のようになる。

蓮華定院から高祖院までの間隔は直線距離にして三〇〇ｍ程である。図版10は現在の地図に高祖院があった推定場所と、細川満元の宝篋印塔が見出された地点、後述の鉢伏山山頂を挙げたものである。それで、何故これ程の距離があるにもかかわらず、筆者が今回発見した細川満元の宝篋印塔を高祖院関係の遺物と推定する根拠は、その高祖院の敷地の広さである。『紀伊続風土記』の高祖院の項に記載の記述に、



図版 10　細川満元宝篋印塔発見地点・鉢伏山山頂・高祖院推定地

此地大師堂の東山の麓五の室路の北にあり地坪合して二千九百四十二坪七歩四厘あり東は康徳院に隣り南は墾道に限り西は大師堂路に限り北は鉢伏山あり

とあることによる（傍点筆者）。[註26] 三〇〇〇坪近くもの広大な敷地を、高祖院が要していたことを明記している。文中の「鉢伏山」とは、聖方の東照宮のある付近の裏山のことである。[註27] この鉢伏山の標高は九〇〇mで、五室谷から一心院谷を山麓にする。まさに、高祖院の広い境内地の一角の「鉢伏山」の山麓から、細川顕氏の宝篋印塔は見出されたのである。

この細川氏と高野山高祖院については、坂口太郎氏より有益な三点の関係史料を御教示いただいた。それが「高野山文書出納注文」「果宝僧都日記」「御前落居記録」である。

先ず、「高野山文書出納注文」は高野山文書の「又続宝簡集百十二」に収録のものである。[註28] 暦応三年（一三四〇）八月二十三日と同年十月四日付のもので、高野山側の十七通の文書を京都の北朝方へ提出して、その返納や仲介を、高祖院と龍恵房なる人物が取り次いだことを伺わせる内容となっている。同文書の前半部分を以下に紹介する。文書中の合点等の符号は省略した。暦応三年（一三四〇）といえば、細川顕氏が高祖院へ発給した同院への寄進状から二年後のことである。高祖院が京都の北朝方とより親密な関係となっていた様が伺われる。

京都使節方　上文書

一持明院殿御告文幷院宣具書等六通

為沙汰預置高祖院了

鳥羽院　庁

一荒川庄御寄附院宣一通 大治四年十月五日

已上二通者龍恵房帰山之時奉返納了 暦応三年十月四日

八條院庁下文一通 応保二年四月廿一日
新院庁下文一通 治承四年十二月日
此一通ハ為京都沙汰預置高祖院了
暦応三年八月廿八日　（以下、略）

次に「杲宝僧都日記」は、東京大学史料編纂所蔵「円融院御潅頂記」の紙背にあるもので、貞和三年（一三四七）十一月二十六日条に、

高野高祖院於天王寺打死

と記されている。同日の南朝方の楠木正行軍と、北朝方の細川顕氏らが率いる室町幕府軍とが戦った住吉・天王寺合戦において顕氏軍は大敗するが、この時に高野山高祖院の僧侶が戦死したことを明記しているのである。同史料の紹介者の後藤紀彦氏は、「陣没した高祖院は足利尊氏における醍醐三宝院賢俊の如く、顕氏に扈従した僧と思われる」という重要な指摘を示している。[註29] いうまでもなく賢俊は、足利尊氏の腹心の一人で、尊氏に従軍した僧侶として著名である。

この事件は、暦応元年（一三三八）発給の「細川顕氏寄進状」から、九年後の出来事である。細川氏と高祖院との関係の始まりは未詳であるが、高祖院が細川顕氏からの寄進状により関係が密接となり顕氏の傍に従軍していたことが推察される。坂口太郎氏は、上記の「高野山文書出納注文」の史料と合わせて、この当時高祖院の僧侶は京都に在京していた可能性を筆者へ御教示いただいたが、極めて注目すべき見解である。

次に挙げるのが、『御前落居記録』である。この史料は、室町幕府第六代将軍の足利義教の治世の永享二年（一四三〇）九月二日より同四年（一四三二）十二月二十五日に至る七十二件の幕府に受理された各種訴訟の裁判記録である。その中の永享四年

（一四三二）十一月二十六日付の文書に、「高野山高祖院雑掌与細河陸奥守満経代相論和泉国土生郷地頭職三分壱事」として、細川満経と高祖院の間で相論が発生している。細川満経は顕氏の孫にあたる。満経が、祖父が寄進した高祖院の地頭職を横領する事件が起きたのであった。顕氏の時代に築かれた細川氏と高祖院との関係が、この頃には変化した様子を伝えている。この具体的な事象は、極めて興味深い。この事件は細川満元の宝篋印塔にある満元の没年の応永三十三年（一四二六）から六年後のことである。幕府の裁断は、顕氏が高祖院へ発給した上記の寄進状を根拠に、高祖院の訴えを認めるものとなっている。史料の全文を挙げると次のようである。[註30]

高野山高祖院雑掌与細河陸奥守満経代相論和泉国土生郷地頭職三分壱事

如雑掌申者、祖父顕氏為寄進地之處、今度安堵之刻、一円横領、無其謂云々、満経代如支申者、忘譜代旧好訴申公方條、背本意見間、雖為少分、可奉寄他院云々、顕氏寄進之状異于他、其子孫争可及違乱哉、所詮、任暦応元年十月九日寄附之旨、可返付当院由、所被成御教書也、

永享四年十一月廿六日　　左衛門尉貞親

肥前守為種

四．おわりに

これまで南北朝時代の高野山は、南朝・北朝の両朝に対して「政治的中立」の立場を保持して時代をくぐり抜けたとされていたが、上記の高祖院の関係史料により、高祖院の立場は明らかに北朝方であったことは注目される。高野山が南北朝時代に「政治的中立」を保ったとする根拠となる史料は、貞和四年（一三四八）三月の「置文」である。[註31]「金剛峯寺一味契状」を文書名とするこの置文の発給が、住吉の戦で高祖院が討ち死にした四ヶ月後のものであることにも注目される。高祖院の討ち死にという悲劇を高野山側が深刻に受け止めて、翌年の貞和四年（一三四八）の置文となったことも推察される。

次に、細川氏と高祖院の師檀関係（あるいは宿坊関係）も、一貫したものではなかったことが、『御前落居記録』により伺われる。明らかに、両者の関係は希薄なものとなっている。今回発見の細川満元宝篋印塔は、その宝篋印塔造立までは細川氏と高祖院が師檀関係を保っていたことを証明する資料と位置づけされる。

それにしても、本稿の最初に紹介した『高野山通念集』が記す、慶長年中に建立された顕氏以下の細川家代々の諸尊霊を祀る霊廟は如何なる性格の施設であったのであろうか。おそらくは、慶長年間に高祖院側が意図的に建立したものであって、何らかの必要性が生じたためであろう。詳細は不明である。

高野山には、この細川満元の宝篋印塔の他に、同時代の武将の石塔として、奥之院の弘法大師の御廟前の御所の芝には足利将軍家関係の石塔が六基確認されている。それが、足利三代将軍義満の正室の北山院と側室の勝鬘院、四代将軍義持、五代将軍義量、六代将軍義教、七代将軍義勝である。この将軍家の他では、赤松政則と、少し時代は遡るが畠山国詮の石塔が確認されていて、いずれも宝篋印塔としての石塔造立である。[註32] さらに詳しくは、今後それら石塔の調査研究を進め、考察を深めて論考を公にしたい。最後になったが、坂口太郎氏からは種々御教示頂いた。記して感謝の意を表したい。

（註1）室町時代の大永七年（一五二七）に真田家の先祖の海野棟綱が蓮華定院宛に発給した宿坊証文が、真田家が蓮華定院宛に発給した現存最古のものとして残る。

（註2）『紀伊続風土記』巻五十四、『紀伊続風土記高野山之部』総分方巻之十一の蓮華定院の項。
『高野山通念集』（『近世文芸叢書』第二名所記二（明治四十三年刊）所収）。

（註3）『尊卑分脈』第三篇（『新訂増補国史大系』第六十巻上）。

（註4）『薩戒記』応永三十三年十月十六日の条（『大日本古記録』薩戒記三（平成十八年刊）。
『満済准后日記』応永三十三年十月十六日の条（『京都帝国大学文科大学叢書』第四（大正九年刊））。

（註5）川勝政太郎『石造美術入門 歴史と鑑賞』（社会思想社　昭和四十二年刊）。

（註6）周辺地域の再調査に際しては、高野七口再生保存会の入谷和也・城戸良幸・北本一美・児玉康宏・森下稔の各氏の協力を得た。

（註7）『角川日本地名大辞典 二六 京都府上巻』（角川書店　昭和五十七年刊）。『日本歴史地名大系第二七巻 京都市の地名』（平凡社 昭和五十四刊）。

（註8）『京都府地誌』を史料に、『日本歴史地名大系第二七巻 京都市の地名』（平凡社　昭和五十四刊）に記載。
（註9）『両山歴譜』（『本能寺史料 古記録篇』（藤井学・波多野郁夫編 思文閣出版 平成十八年刊）所収）。
（註10）いずれも、『釈教歌詠全集』第三巻（河出書房　昭和九年刊）所収。
（註11）木下浩良「金剛峯寺遺跡（大乗院跡駐車場整備事業に伴う発掘調査）出土の石造物について」『金剛峯寺遺跡―大乗院跡駐車場整備事業に伴う発掘調査報告書―』（高野町教育委員会、平成十九年刊）所収。
（註12）木下浩良「高野山金剛三昧院の礎石転用五輪塔と転用の意義について」『密教学会報』五三号（高野山大学密教学会　平成二十七年刊）所収。木下浩良「高野山奥之院出土金銅製宝篋印塔の銘文について」『密教文化』二四二号（密教研究会　令和元年刊）所収。
（註13）享禄三年（一五三〇）「村上顕胤宿坊証文」・天正七年（一五七九）「小泉昌宗宿坊証文」・天文四年（一五三五）「伴野貞秀宿坊証文」・天正八年（一五八〇）「大井正棟宿坊証文」（「蓮華定院文書」『高野山文書』第七巻（高野山文書刊行会　昭和十三年刊）所収）。
（註14）坂口太郎氏御教示。
（註15）本寄進状の全文については、『高野山大学創立百十周年記念善本聚粋』（高野山大学附属高野山図書館 平成八年刊）に影印掲載されている。
（註16）『紀伊続風土記高野山之部』巻之十八の高祖院の項。
『高野山通念集』（『近世文芸叢書』第二 名所記二（明治四十三年刊）所収）。
（註17）『高野山通念集』（『近世文芸叢書』第二 名所記二（明治四十三年刊）所収）。
（註18）『中世法制史料集』第六巻（佐藤進一・百瀬今朝雄・笠松宏至編　岩波書店 平成十七年刊）所収。
（註19）（註16）に同じ。
（註20）『高野山諸院家帳』は高野山多聞院重義が文明五年（一四七三）二月に記したものである。奥書を紹介すると、「文明五癸巳二月廿八日於谷上多聞院書之、住持重義（泉慶房六十九歳）」とある。本文献は高野山三宝院所蔵の文献で、高野山大学図書館へ寄託の資料の一つ。書風及び紙質等から、奥書にある室町時代中頃の文明五年（一四七三）のものに間違いない。本文献を初めて公にされたのは中野達慧氏で、「高野山史の研究（下篇）」（『密教研究』第五二号（昭和九年刊）所収）において紹介された。
（註21）『紀伊続風土記高野山之部』。
（註22）この点については、既に藤川昌樹氏により詳細な指摘がなされている（藤川昌樹「中・近世高野山における「谷」の構成と変遷」『建築史の空間 ― 関口欣也先生退官記念論文集 ―』（中央公論美術出版　平成十一年刊）所収。
（註23）日野西眞定編『高野山古絵図集成解説索引』（タカラ写真製版株式会社　昭和六十三年刊）。
（註24）日野西眞定編『高野山古絵図集成』（清栄社　昭和五十八年刊）。
（註25）日野西眞定編『高野山古絵図集成』（清栄社　昭和五十八年刊）、及び同書所収の明治二十一年「高野山焼失全図」。
（註26）『紀伊続風土記高野山之部』巻之十八の高祖院の項。

（註27）高野山山頂は八葉の蓮華の華が咲いている様を表しているとの信仰があり、周囲の山々を内八葉、外八葉とする。鉢伏山は外八葉の山の一つ（甲田博史「高野山八葉峰」『高野山大学学報』四十号（高野山大学　平成十一年刊）所収）。鎌倉時代初期の成立の文献とされる『高野山秘記』に、鉢伏山は「覆鉢山」と記されている（「高野山秘記」『中世高野山縁起の研究』（阿部泰郎編　元興寺文化財研究所　昭和五十八年刊）。

（註28）「高野山文書出納注文」（東京大学史料編纂所『大日本古文書　家わけ第一　高野山文書』第八巻「又続宝簡集百十二一一八一四」。

（註29）後藤紀彦「口絵解説　果宝僧都日記」『東京大学史料編纂所報』十八号（昭和五十八年刊）所収。

（註30）桑山浩然校訂「御前落居記録」『室町幕府引付史料集成』上巻（近藤出版社　昭和五十五年刊）所収。

（註31）「金剛峯寺一味契状」『金剛峯寺文書　乾』（『大日本史料』第六編之十一）。

（註32）木下浩良「高野山の石造物」『高野町史　民俗編』（高野町　平成二十四年刊）所収。

（キーワード）細川満元・細川氏・高野山・宝篋印塔・高祖院